

加藤周一 「語りおくこといくつか」

なぜ、「日本文化における時間と空間」を書こうと思ったのか

「日本文学史序説(上巻 1975 年、下巻 1980 年)」において、造形美術を通して見た日本の思想史を、また「日本 その心とかたち(2005 年)」では文学と美術を通して見た考え方、感じ方を関係づけることによって、日本人のメンタリティというか、個人個人よりもむしろ日本社会全体としてのものの考え方、感じ方の特徴を見極めたかった。

ヨーロッパに暮らして、自信を持ったのは日本の美術。浮世絵、木版画、そして焼物。焼物は中国が一大先進国であったが、ろくろを使っている。日本は手でこねている。世界を魅了する日本美術の表現技術がある。

今回の目的は「日本の文化はどのようにして戦争を起したのか、どうしてあんなきれいな茶碗をつくった日本が・・・」ということのつながりを説明したい。なぜ、日中戦争、十五年戦争はなぜ起きたのか？ どのような心理状態の人たちが集まると、こういう悲惨なことになるのかを知りたかった。

なぜ、～時間と空間から読み解く～そういうおき方をしようと思ったのか

空間(=ここ)については、日本人の行動様式が大変集団主義的で、集団の利益というものが、個人の利益に優先する。ほとんど個人の人権を犠牲にしても、団体の利益を重んじるという傾向がある。(大勢順応主義)

集団主義が強くて、集団の中の人たちとの人間関係と外の人たちとの人間関係とは違う(ダブルスタンダード)。ただし、伝統的集団主義だけでは、社会が変化していく力を説明することは不十分。それに西洋型資本主義が結びついて生み出したのが、日本の近代化。ダイナミズムはそこから生まれた市場経済の競争原理。

時間(=今)については、“初めなく終わりなし”。創世紀がはっきりしない。日本人は創造というものに、それほど深い興味をもたなかった。ユダヤ人にとっては神が宇宙を創造しなければならなかった。存在するものには、初めがなければ、話しの辻褄があわない。古事記の時代の日本人たちはそうではない。時間が構造化できない。構造化できないから、いつも現在が大事。

日本の対外関係は大体そういうスタイルが多い。敏捷に立ち回るのは、危機が迫ってからで、危機がそもそもおこらないように手を打つということはあまりない。

“ムラ”のなかで暮らしていれば、その中はあまり変化はおこらない。だから、“今”が大事になる。—“今”主義。

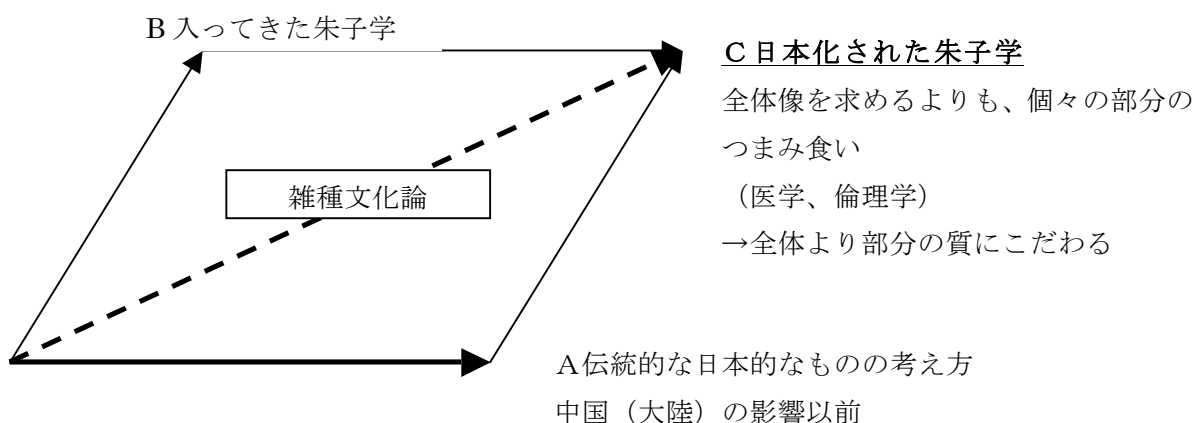
「明日は明日の風が吹く」。先の見通しをつけるのが、ヨーロッパ的考え方で、日本では注意を現在に集中する。

そうすると、“空間”に対する日本的な態度の原型は、閉じた空間で内外の区別が極めて鋭い共同体に見ることができる。

“時間”については、未来も過去も一応忘れて、現在起こっている事態をそれだけで解釈すれば、十分解釈することができる。

外来文化をどのように受け止めたのか

「考え方のベクトル」 朱子学の事例 朱子学とは人間と自然の両方を関連させながら宇宙全体を理解していく学問



どうすれば「今＝ここ」から脱出できるか～グランドデザインをもてない日本

意識的に先を見るように努力すること。世界の中の日本という発想がない。アメリカは自分に都合の良い世界秩序をつくらうとする。フランスも同じ。考えられる世界秩序はいくつかあって、その中でアメリカに一番利益になりそうな秩序を提案主張する。

日本は「そういうことでは日本の企業が持たない」とか「それでは日本の農家が潰れる」とか直接的なことを訴える。

“ムラ”メンタリティは、外に向かって国際的な議論をしていない。

日本に対して損になりそうなことが通りそうになる場合、抵抗してそれで負けたら我慢する。我慢に我慢を重ねて、これ以上我慢できなくなれば、「ここで一か八かやってみよう」となる。

(書き上げての思い)理論は緻密であればあるほど良いというものではなく、適度な程度にあいまいであった方がよい。

民主主義を考える2つの言葉

民主主義とは、多数決ではなく、少数意見の尊重こそ民主主義。

孔子「マナビテオモワザレバクラシ」=問題意識を持つことがなければ、結局歴史はわからない⇒立場を変えて見ること
福沢諭吉「一身独立して一国独立する」=自分自身の見方をつくらねばならない⇒真の民主主義のために市民グループの連絡網を。

世界の50年をどう見るか M原理とP原理

社会主義的社会=公権力が経済活動に直接介入したり、私的企業の活動を強く規制する社会(P=パブリック原理)

資本主義的社会=自由市場に経済的秩序の運営を任せるといふ社会(M=マーケット原理)。旧ソ連はP原理社会。

米国、西欧、日本はM+P原理社会、2つの原理を混ぜることであまくいく。北米は例外的、西欧はほとんどすべて社会民主主義国。

	M原理	P原理
プラス	物質的インセンティブと経済効率	基本的な生活の保障
マイナス	弱肉強食=貧富の差の拡大、教育、文化、福祉はM原理では成り立たない	労働意欲の低下、イデオロギー的権威と政治権力の一体化

自由主義万能主義

狂気の地球化=南北格差拡大(世界の最も裕福な人 20% vs. 貧しい人 20%) 30倍 ⇒ 82倍

結果、日本の教育、文化福祉に起こっていること

- ・出版界の危機=良質な出版を行う中規模出版社の低迷、文化の質低下
- ・医療の自由化=福祉予算削減、商業的な利益の追求は危険
- ・公衆衛生面での国際協力こそ重要=EC国境なき医師団

※ 参考:「加藤周一 戦後を語る」「語りおくこといくつか」(かもがわ出版、2009)

※

【発見したこと】

自分自身の見方をつくるために、見方を変えることの重要性を再確認

- ・ 民主主義 自分自身の意見 **産業社会 vs.消費社会→産業社会 &消費社会**
- ・ 資本主義 資本主義とは何か、父アダム・スミスの定義 M原理とP原理
- ・ “ムラ”メンタリティ 世界の中の日本 東京裁判